支那に於ける西洋的畫風と畊織圖

（本會研究所員故星野日子四郎君追憶講演）

東京文理科大學教授
文學博士　中山久四郎

一

故人星野學士は浮世繪に趣味を持つて熱心に研究されたと承つてゐるので、こゝには故人を偲ぶ意味て、特に繪畫の事に觸れて申し述べる。

支那の繪畫は線を主として陰影を作る事なく、又、遠近法を重視しないから、隨つて其の表現された圖柄は實際の理論に合はぬ主觀的なものが多いが、而も其處に東洋畫の趣致があると見られてゐる。此の評は大體に於て事實に當つてゐるが、乍併支那にも西洋風に陰影を重んじ、畫面に凹凸の差を現したと見える作品が無いとは云へない。既に六朝の梁から唐代にかけても二三の例が存するが、續いて宋代の李營丘・胡九齡・又は燕穆などの畫に西洋畫風の陰影的な趣が出てゐる事は夙に人々の指摘してゐる所である。但し支那へ明らかに西洋畫が入つて來たのは明末で、その頃から來始めたゼスイット派の耶

蘇教々師が、持ち込みもしたらうし、又、畫才のある者は自分でも畫いた事であらう。明末の利瑪竇、清朝の艾啓蒙・安德義などは、支那名を稱してゐるが、皆西洋人であつて、是等の人々が實物によつて支那人の間に西洋畫法を傳へ、西洋畫の特色を知らしめた。所謂る西法又は海西法の稱が起つたのは其れ以來であつて、清朝の焦秉貞等が所謂る中西の兩畫風を融合して一種の新畫風を聞いた事は美術上に名高い事實である。焦氏の外にも唐岱・沈源・張廷彥等の人々は、西人朗世寧との合作を發表してゐるが、こゝには專ら焦秉貞描く所の畊織圖の事に制限して述べたいと思ふ。

二

畊織圖は男は耕し女は織る農家の實況を圖に現したもので、焦秉貞が康熙帝の勅命を受けて描出し、圖成つて獻呈したのに對して、皇帝親ら語を題されてゐる。つまり農民の勞苦に對する康熙帝の「心寄せ」の現れである。此の畊織圖の由來に就ては約二十年前に史學會で講演して、史學雜誌の第二十三編十一號に筆記が載つてゐるから詳細な事は省くが、斯かる農村風景が畫題として注意されるに至つたのは南朝の初期からで、元代の事を書いた『輟耕錄』にも其の事が出てゐる。されば清朝の康熙帝が此の畫題に心を寄せられたのは別に不思議のない事であるが、焦氏の畊織圖の特色は、之を西洋畫風に描出した事にある。これは元來清朝は滿洲に起り、異民族から入つて中國の主となつたものであるから、勿論

支那古來の傳統文化も尊重したが、それと同程度に外來の文化に興味を持つて、漢人以上に之を尊重した。それ等の點から繪畫の上にも進んで西洋風を採り入れ、畊織圖の如きものをも敢て西洋風に畫かせたのである。故に畫題は等しく畊織圖でも、南朝初の其れと、清朝の此れとは互に趣を異にしてゐるのである。南朝初期の畊織圖は幸に延寶年間に我が日本で忠實に飜刻して狩野家に傳へてゐる物があるので、それと比べて見ると、著しい相違である。此の時に焦秉貞の描いた畊織圖が見事の出來ばえであつたので、焦の流を汲む者は勿論、他の畫家等も多く之に倣うて同じく西洋畫風で畊織圖を畫いた。『國朝印畫錄』だけで見ても、冷枚・陳枚等可なり多くの人々の畊織圖のあつた事が知られるのである。

是等諸家の畊織圖は、清代の文化が追々我が日本に傳來する其の一部として輸入されたのであるが、その結果として、我が日本畫人の間にも、早く明治以前に於て西洋風の繪が行はれたのである。尤も長崎・平戸等を經て、米・英・蘭等の諸國から直接に及ぼした影響も相當考へねばならぬが、その外に支那の畊織圖を通して、西洋畫風の凸凹とか陰影、遠近、大小等を現す描法を習得した事が、蔽ふべからざる日本美術史上の一現象たることは、『文晁畫談』『嬉遊笑覽』其の他を一見すればよく分るのである。我が日本で、「遠視法の畫」又は「浮繪」の名を以て呼ばれたのは、其の種の畫である。

さて、以上の事は殆ど日本美術史上の定說と云つても可い程のものであるが、私は之を實際に證明す

べき面白い畫を發見した。それは「農民耕作の圖」と題する明治十四年の板行物である。筆者は明治の浮世繪家楊州周延であるが、明治の初年に斯樣な畫が出版されたのは、決して突然の事ではなく、其の以前、抑も畊織圖が輸入された頃から、畫家の間にその新畫風が尊ばれると共に、それが領内農民の勞苦に心を注いでゐる賢明な大名たちの目に觸れて、深く其の畫趣に感じ、同じく畫を描かせるにも特に命じて畊織圖を畫かせる事が行はれてゐた結果であらう。本年の春に催された國寶展覽會の第二會場に出陳されてあつた椿山の双幅なども、一方には水田、他方には耕織の圖を現したもので、全く焦秉貞の畫いた佩文齋畊織圖と兄弟關係にあると思つた。周延の畫は畫風こそ純日本畫であるが、全體の景趣といひ、個々の人物の風俗と云ひ、全く焦氏の原畫に摸したもので、二十三枚に分たれてゐる畊織圖の中で凡そ十四枚分程を、ソックリ其の儘狹い畫面に寫し出してある。試に兩方を照らし合せて見ると、僅に違ふのは牛を馬に書き換へたとか、收穀を倉入する倉庫を日本風にしたとか、支那には見られない堀切の菖蒲を取り込んだとかの微細な部分だけで、殊に浸種、拔秧、灌漑等の描寫とピッタリ一致してゐる。

以上私は支那の畊織圖を本として、それが日本の畫界に及ぼした影響の概要を申し述べたが、更に之を明治以前約二百五十年の間に入つて來た清朝文化の影響の一つの現れとして此の事實を見るとき、私は別な意味での面白さを感ずるものである。